

指揮：佐々木新平

Shinpei Sasaki conductor

秋田県出身。東京学芸大学芸術文化課程音楽専攻を経て桐朋学園大学にて指揮を専攻。ヨーロッパ各地の国際指揮マスタークラスに選拔され、J.パヌラ、H.アンドレシュク、M.ストリンガーら巨匠たちの薫陶を受ける。2013年よりミュンヘンへ留学。ドイツを中心にヨーロッパ各地でさらなる研鑽を積んだ。2012年の第9回、2017年の第10回フィテルベルク国際指揮者コンクールにおいてディプロマ、2015年プザンソン国際指揮者コンクールにおいて本選最終の8人に選出。これまでに国内の主要楽団に客演し、現在オーケストラを中心に、吹奏楽、合唱、オペラ、バレエ等あらゆるシーンで才能を発揮。東京佼成ウインドオーケストラとは特別演奏会など様々な活動で共演を重ねている。また2021年1月よりヤマハ吹奏楽団常任指揮者に就任し、吹奏楽の新たな境地を切り開く俊英として期待が寄せられている。その他、NHK公開収録コンサートへの出演、ポップカルチャーにおけるオーケストラレコーディングや公式コンサートでの指揮、さらに映画では出演者への指揮指導や劇中音楽のスタジオ収録指揮を務めるなど多方面に活動の幅を広げている。しなやかな足取りで、ひたむきに遥かなる高みに向かう若き指揮者。



林田祐和 *Hirokazu Hayashida*

宮崎県出身。東京藝術大学卒業・同大学大学院修士課程修了。第22回日本管打楽器コンクール・サクソフォン第1位。サクソフォンを田中靖人、須川展也、富岡和男の各氏に師事。室内楽を中村均一氏に師事。クローバー・サクソフォン・クワルテット、清水靖晃&サキソフォネッツメンバー。洗足学園音楽大学、武蔵野音楽大学各非常勤講師。東京佼成ウインドオーケストラ団員。



河原史弥 *Fumiya Kawahara*

東京都出身。洗足学園音楽大学を首席で卒業。同時に優秀賞を受賞。同大学卒業演奏会、第32回ヤマハ管楽器新人演奏会に出演。第84回日本音楽コンクールトランペット部門入選。第87回日本音楽コンクールトランペット部門第3位。第36回日本管打楽器コンクールトランペット部門第2位。トランペットを津堅直弘、高橋敦、杉本正毅、三澤慶の各氏に師事。室内楽を佛坂咲千生、渡辺功、菊本和昭の各氏に師事。現在、東京佼成ウインドオーケストラ団員。

演奏：東京佼成ウインドオーケストラ *Tokyo Kosei Wind Orchestra*

1960年(昭和35年)5月、立正佼成会附属の「佼成吹奏楽団」として発足、その後1973年に「東京佼成ウインドオーケストラ」へ改称した日本が世界に誇るプロ吹奏楽団。吹奏楽オリジナル作品、クラシック編曲作品やポップス、ポピュラーまで幅広いレパートリーの演奏を通し高い音楽芸術性を創出し、多くの人が楽しめる管楽合奏を展開、各地のコンサートで好評を博している。また多くのレコーディング、テレビ・ラジオに出演し、吹奏楽文化の向上・普及・発展に尽力している。

2020年に楽団創立60周年を迎え、同年1月より大井剛史が正指揮者、トーマス・ザンデルリンクが特別客演指揮者、飯森範親が首席客演指揮者、藤野浩一がポップス・ディレクターに就任。



©Atsushi Yokota

TKWOオリジナルグッズ好評販売中!

ブラボータオルや
Tシャツなど
多くの商品を
ご用意しております♪



詳細・ご注文は公式サイトを
ご確認ください。

東京佼成 ウインドオーケストラ ひたちなか・仙台公演



指揮：佐々木新平

ひたちなか公演

2021 5.19 WED

ひたちなか市文化会館 大ホール 18:30開演(17:30開場)
〒312-0056 茨城県ひたちなか市青葉町1-1 029-275-1122

仙台公演

2021 5.20 THU

電力ホール 18:30開演(17:30開場)
〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町3丁目7-1 022-225-2251

【ひたちなか公演】主催：東京佼成ウインドオーケストラ 【仙台公演】主催：宮城県吹奏楽連盟・東京佼成ウインドオーケストラ

Program



2021年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲(全5曲)

- I トイズ・パレード／平山雄一(第30回朝日作曲賞)
- II 龍潭譚／佐藤信人
- III 僕らのインベンション／宮川彬良
- IV 吹奏楽のための「エール・マーチ」／宮下秀樹
- V 吹奏楽のための「幻想曲」ーアルノルト・シェーンベルク讃／尾方凜斗(第12回全日本吹奏楽連盟作曲コンクール第1位)

音楽祭のプレリュード／A.リード

バラード～アルト・サクソフォンとバンドのための～／A.リード※

トランペットのための頌歌／A.リード※※

たなばた／酒井 格

Solist



アルトサクソフォン※
林田祐和



トランペット※※
河原史弥

※本公演は約80分プログラムとなっており、途中休憩はございません。

楽曲解説

富樫鉄火(音楽ライター)



2021年度全日本吹奏楽コンクール課題曲:全5曲

◆トイズ・パレード／平山雄一

課題曲I(第30回朝日作曲賞受賞)。「初期ディズニーのミュージカル映画」のような「明るく楽しいマーチ」を目指して作曲された。いかにもトイ(おもちゃ)が行進しているような陽気なマーチ。作曲者・平山雄一(1995～)は、尚美学園大学・作曲コース卒業。作曲や編曲などで活躍している。【小編成対応／約3分半】

◆龍潭譚／佐藤信人

課題曲II。耽美的な小説家・泉鏡花が1896(明治29)年に発表した短編小説「龍潭譚」(りゅうたんだん)を題材にした曲。行っとはいけないといわれていたツツジの丘を訪れた少年が“神隠し”にあい、幻想に惑わされて帰宅する、不思議な小説。音楽も、ファンタジーとドラマが交錯する印象的な曲想。作曲者・佐藤信人(1990～)は、尚美学園大学・作曲コース～大学院修士課程修了。おなじ泉鏡花の『義血侠血』『薬草取』なども音楽化しているそうである。【標準編成／約5分】

◆僕らのインベンション／宮川彬良

課題曲III。《吹奏楽の為のソナタ ブラック・ジャック》や、《マツケン・サンバII》などで知られる、アキラさんこと宮川彬良(1961～)による、委嘱作品。「インベンション」とは、二声で構成された器楽曲で、作曲者は「インベンションは『発明』です。パッサが発明した二声の自由、掛け合い助け合い溶け合う事から生まれる本当の自由。是非、その事に気付いて欲しい。そこにこそ僕らの未来がある、と僕は信じています」と述べている。【小編成対応／約4分】

◆吹奏楽のための「エール・マーチ」／宮下秀樹

課題曲IV。作曲者・宮下秀樹は、新潟大学教育学部～東京学芸大学大学院作曲専攻修了。現在、新潟市の中学校で教諭をつとめ、吹奏楽部の顧問。作曲家としても、室内楽曲田オベラなどを発表している。本曲は「誰かを応援したい時に演奏できる曲に」との願いを込めて書かれた。【小編成対応／約3分半】

◆吹奏楽のための「幻想曲」ーアルノルト・シェーンベルク讃／尾方凜斗

課題曲V(第12回全日本吹奏楽連盟作曲コンクール第1位)。十二音技法で知られるアルノルト・シェーンベルク(1874～1951)の《ピアノとヴァイオリンのための幻想曲》Op.47にインスパイアされた曲。「その音列を私なりの方法で運用した、繊細で流動的なテクスチュアを特徴とする前半部と、力強い律動を含有する行進曲の様式に音列が搭載される後半部」構成されている」(作曲者コメント)。全編が変拍子と特殊奏法。楽器編成も大規模で、フルート、オーボエ、バスーンなどは2番まで指定されている。作曲者・尾方凜斗(1995～)は、日本大学芸術学部～東京音楽大学大学院作曲指揮専攻在籍(作曲時)。【大編成／約3分半】

◆音楽祭のプレリュード／A.リード

本年は、「吹奏楽の神様」とも称されたアルフレッド・リード(1921～2005)の生誕100年にあたる。リードは、東京佼成ウインドオーケストラ(TKWO)ともしばしば共演した、縁の深い作曲家・指揮者だった。後半は、そんなリードの初期名曲が続々登場する。まず本曲は、1957年にオクラホマ州で開催された音楽祭のために書かれた、リード最初期の作品のひとつにして、出世作。全編が輝かしいファンファーレ風で、短い曲にもかかわらず、大曲の風格に溢れている。日本では、1965年度全日本吹奏楽コンクール(全国大会)で、高知商業高校が自由曲として演奏したのが最初。その後、1970年度に中学の部以外の全部門の課題曲に指定された。これによって、リードの名前は一举に日本中に広まった。原題のまま《フェスティヴァル・プレリュード》と表記されることもある。【約5分】

◆バラード～アルト・サクソフォンとバンドのための～／A.リード アルト・サクソフォン:林田祐和

1956～58年にかけて、主にクラリネットで知られる管楽器メーカーのルブラン社が、若きアルフレッド・リードに、ソロと吹奏楽のための曲を3曲、委嘱した。自社楽器の宣伝もかねたコンサートやクリニック用で、それぞれ、アルト・サクソフォン(バラード)、トランペット(頌歌)、クラリネット(セレナーデ)をソロとする。本曲は、そのなかの1曲。1958年の初演は、クラリネット&サクソフォンの名奏者、ヴァンセント・アバト(1919～2008)がソロをつとめた。グレン・ミラー楽団を経てメトロポリタン歌劇場などでも活躍した、オール・マイティの名奏者である。本日のソロはTKWOの林田祐和。知的で美しい旋律が展開するが、リード自身、「バンドが大編成の際は奏者を減らすべき」と述べており、早くも、大音量に頼らない、精緻な吹奏楽の響きを目指していたようである。【約5分】

◆トランペットのための頌歌／A.リード トランペット:河原史弥

これも前曲とおなじ出自の曲。1956年の初演ソロは、ベニー・グッドマンとの共演や、教則本などで知られる名トランペッター、ドン・ジャコビー(1920～1992)がつとめた(ソロ部分の校訂も)。「頌歌」(オード)とは、本来は、語りや合唱で表現される抒情詩のこと(ベートーヴェン《第九》の「歓喜に寄す」が典型)。本日のソロは、TKWOの河原史弥。カップ・ミュートも使いながら、じっくりと、美しい「無言歌」を奏でる。なお、ここまでの3曲は、アルフレッド・リードがまだ楽譜出版社に勤務していた30歳代半ば、最初期の作品。すでに吹奏楽の新しい響きを確立していたことがわかる名曲群である。

◆たなばた／酒井 格

《大仏と鹿》《森の贈り物》や、春のセンバツ高校野球・入場行進曲の編曲などで知られる関西在住の人気作曲家、酒井格(1970～)が高校3年生のときに作曲。大阪音楽大学の在学中に、自ら売り込んでオランダのデ・ハスケ社が採用。すぐに出版され、世界中に知られた、処女作にして出世作。天の川で離別させられた彦星と織姫が、年に一度、7月7日の夜だけに会えるとの七夕伝説がモチーフ(中間部のアルト・サクソフォン=織姫、ユーフォニアム=彦星)。また、当時、作曲者が高校吹奏楽部で親しんでいた数々の名曲からの影響やオマージュにあふれている。【約9分】〈敬称略〉